

台湾における嬰霊供養

生駒孝彰

(龍谷大学国際文化学部・教授)

(和文要旨)

台湾では中絶が1985年に合法化された。それ以降、中絶手術を受ける女性の数は急増している。ある統計によると年間の件数は40万以上、と報告している。筆者はこれまで、中絶と宗教についての調査のため台湾を三回訪問した。仏教では中絶を五戒のうちの一つである殺生戒にあたる、として禁止している。だが、僧侶のなかには、嬰霊供養(日本の水子供養に相当する)を行っている者もいるようである。一方、道教では中絶(流産をも含む)によって死亡した胎児の霊は生存中の両親や肉親に肉体的・精神的害をもたらすとして、宗教者の助けによって許しを請い、次の世に無事に送る必要がある、として供養をしている。筆者は、2003年3月、台湾で著名な苗栗郡にある龍湖宮を訪ね、嬰霊供養について調査した。

(SUMMARY)

Abortion was fully legalized in Taiwan in 1985. Since then it has known that abortion rate in Taiwan is extremely high. According to a statistic, there are more than 400,000 cases each year. The author had visited Taiwan 3 times between 2000 and 2003 and had interviewed on abortion and religions. Most of them were Buddhist and Taoist priests. In Buddhism abortion is prohibited by the precept, but some Buddhist monks and nuns are involved in services for aborted fetuses. In Taoism they believe that aborted fetuses cause physical or psychological harm to the living parents, so it is necessary for them to beg forgiveness with the help of a religious master and send the aborted fetuses to the next life. Many Taoist temples are providing special services for aborted fetuses. The author visited "Ryuko-gu" or Dragon Lake Temple in Miaoli county and interviewed Rev. Lin Jianyin in March 2003. This Taoist temple is well known in Taiwan because of performing special services for aborted fetuses.

中絶手術の現状

台湾における中絶手術の件数を正確に知るのは困難である。2001年3月号の *Catholic World News* 誌には台湾の公的機関が発表した中絶件数が報告されている。それによると2000年には42,282件の中絶手術が行われた、としている。いっぽう、シンガポールの英字紙 *The Strait Times* 紙の2002年7月30日号によると、年間40万件の中絶手術が台湾で行われている、と報道している。

台湾の人口は2千2百万であるから、他の国と比較するとかなり多い、といえよう。中絶がこのように多くなったのは1980年代以降の現象である。増加の理由は1984年、医師が安全と認めたならば中絶手術が受けられる優生保健法が台湾で制定されたのが大きな理由である（法律の実施は85年）。だが、その背景には社会の変化によって価値観が多様化した結果、とされている。特に80年代になって性の解放による未婚女性の妊娠の増加、性教育の不徹底、経済優先による少子化傾向、等々によって中絶手術を受ける女性が増加したためとされている。なお、台湾のみならず、東アジア社会の一つの特徴でもある男児優先思想の影響もかなりあるのがしばしば指摘されている。政府のホームページで1997年における次のような男女児の比率が見られる (<http://www.gio.gov.tw>)。

	男	女
第一子の場合	108	100
第二子の場合	107	100
第三子の場合	112	100
第四子の場合	121	100

この数字から理解されるように、第二子、第三子、第四子となると、胎児が女児であるのがわかると、中絶をすることが多いようだ。

台湾の宗教

The Republic of China Year Book—Taiwan (<http://www.gio.gov.tw>) には2002年における台湾の宗教情勢が出ている。それは次の通りである。

宗教	寺・廟	信者
道教	8,604	4,546,000

仏教	4, 0 1 0	3, 6 7 3, 0 0 0
一貫道	3, 1 2 4	8 4 5, 0 0 0
プロテスタント	3, 8 7 5	5 9 3, 0 0 0
カトリック	1, 1 9 3	2 9 8, 0 0 0

以上の数字からも理解できるごとく、数の上では仏教と道教が圧倒的に多い。なお、一貫道とは中国大陆で始められた道教の改革派であり、仏教の教義を多く取り入れている。無極老中を主神としているが、釈迦も祀る宗派である。台湾に仏教が入ったのは隋代（581－619）に漢民族による、と記録されている。しかし、その記録はややあいまいのようだ。歴史的には1661年、明末の遺臣である鄭成功(1624-1662)の渡台以降と考えられている。日本が台湾を統治した時代（1895－1945）には、日本仏教の影響もかなりあったものの、やはり中国仏教が主流であった。20世紀の中国仏教は道教や民間信仰との融合したものが一般的であったが、共産党政権下の中華人民共和国の時代になるとあらゆる宗教が弾圧を受けるようになった。おおくの仏教寺院は博物館や集会所になり、僧侶は労働者と見なされることになった。もっとも、近年は信仰の自由が認められるようになってはいるが、伝統的な中国仏教は台湾において残っている、という意見が多い。

台湾の仏教は他の国と比較すると、いくつかの特徴がある。それらは、（1）中国仏教の特徴である道教や民間信仰の要素が加わっている。（2）中国仏教には「浄禅両修」という言葉がある。これは、内面的には浄土信仰であるが、外面的には禅の行儀作法に従う、という意味である。この点は大部分の仏教寺院で阿弥陀仏と釈迦の両像を礼拝の対象としていることから理解できる。（3）僧侶の80%が尼僧で、しかも戒律を守っている。男性の僧侶も大部分が独身で戒律を守っている。（4）日本のような檀家制度がない。もっとも一部の寺院では会員制度を採用し、信者たちが寺院の維持や僧侶の世話をしている場合もあるようだ。しかし、僧侶の生活はその実力（宗教家として）によって決まる、といえよう。

なお、1980年度以降、台湾佛教界に注目すべき新しい動きが見られるようになってきている。80年代以降、台湾は経済的に大躍進を遂げている。物質のみでは人間は救われな、と考える人々が増え、精神的な支えを宗教に求める傾向が出てきたのである。それにあたかも呼応するかのように佛教のエリート集団が注目されるようになった。それらは、尼僧の證嚴による慈濟功德会、星雲による佛光山、聖嚴による法鼓山、惟覺による中台禪寺等である。

さて、次に道教だが、仏教と同様に中国の伝統的な道教が見られる、と考えるのがよろしい。道教は紀元前6世紀頃始まったが、その後、中国古来の宗教や他の思想を取り入れながら変化してきた。その結果、現在の道教は儒教、仏教、古代の民間信仰、そして道教本来の思想である神仙思想等が混合したものとなっている。そして、呪術宗教的な傾向が強く、現世利益型の宗教と考えられている。

台湾に道教が本格的に入ってきたのは佛教と同じ時代、すなわち鄭成功の時代である。その後、台湾では佛教とともに中国人固有の宗教として信仰されている。もともと、佛教と道教をはっきり区別する人もいるが、区別をしない人も多い。佛教の信者でありながら道教の神を信仰している、という状態である。それゆえ、道教の宮や廟ではさまざまな神を祀るとともに、釈迦、阿弥陀仏、観音等を祀っている。

しかし、筆者が調査したところでは、佛教の僧侶は戒律を守り、僧侶としての自覚を持っている（一部を除いて）。だが、道教の聖職者の場合、道教の教えを究めようとする佛教の僧侶のような修行者もいるが、多くの道士は肉食妻帯をし、一般人と変わらぬ生活をしている。聖職者としての専従者は少なく、儀式や儀礼のときのみ道衣を着る。また、宮や廟間の交流も少ないようだ。

嬰霊供養と宗教

最初にふれたごとく、台湾では中絶手術を受ける女性が増えている。それに対し水子供養が注目されるようになってきた。なお台湾では水子という言葉は用いず「嬰霊」という言葉が使われている。それゆえ、小論でも嬰霊供養という言葉を用いる。

嬰霊供養が一般化したのは1980年代以降であるが、その理由は日本の水子供養の影響、と考えられている。台湾では日本との交流が盛んだが、特に経済発展をした80年代以降、さまざまな日本文化が紹介された。水子供養もその一つである、とされている。もともと、中国宗教、特に道教にも同じような供養があった、とする説もある。しかしながら、台湾で見られる嬰霊供養と日本の水子供養との類似点は多い。

嬰霊供養に対する宗教界の反応はさまざまだ。キリスト教界では供養はもとより中絶にも強く反対している。だが、佛教界では嬰霊供養に対して三つの考えがある。反対派、賛成派、そして中間派である。中間派では嬰霊供養はそれを受ける人とそれを行う佛教や道教の聖職者の問題であって、外部の者が意見を言うべきではない、という立場を取っている。このように三つの考えがある点について、筆者が2000年9月、台北の国立台湾大学医

学部で医師、僧侶、信者（佛教）の方々と生命倫理と宗教について話し合いをしたときに次のような話を聞いた。台湾には「三教九流」という言葉がある。三教とは道教、仏教、儒教の三つで、九流とはそれぞれに賛成派、反対派、中間派のことである。

三教九流からすると、佛教界で嬰霊供養に三つの考えがあるのは当然といえよう。なお、台湾の儒教だが、各地に孔子廟があり信仰の対象となっている。だが、儒教は宗教ではなく、むしろ日常の精神面、特に倫理・道徳上の指針として必要、と考える人が多い。もともと儒教の立場からすると、中絶にはどうしても批判的になる。その理由としてあげられるのは、『孝経』にある「身体髪膚はこれ父母に受く、敢えて毀傷ざるは孝の始まりなり」の言葉である。子宮の胎児は誕生までは身体の一部と見なし、それを取り出すのはまさに毀傷することになると解釈するのである。また、儒教では亡くなった先祖や両親を子供が供養するのを重視する。しかし、嬰霊供養はまさにその反対になるわけである。

さて、佛教界であるが、筆者が訪問し直接聞いた関係者の話を中心にその対応を紹介してみることにする。筆者は2002年9月に台中を、2003年3月に高雄および花蓮の佛教寺院を訪問した。高雄では佛光山寺の依昱師と生命倫理と宗教について話したが、中絶を佛光山寺では認めないとのことであつた。なぜなら佛教の根本的な戒律である五戒の第一にある殺生戒に反するからだ、との説明があつた。しかし、嬰霊供養については、実際に中絶手術が行われた場合、供養を認めても良いとの考えだ、と述べてくれた。次に花蓮では、佛教慈濟会を訪ねたが、同市にある佛教慈濟総合病院で病院関係者、ボランティアの人々と話をすることができた。なお、同会は他市にも病院がある（2003年の時点で6病院）。同病院では中絶手術は一切行わない。その理由は、佛光山寺と同様に、五戒の殺生戒に反するからだ、としている。なお、嬰霊供養にも反対している、との説明があつた。

台中では台湾で唯一の本派本願寺系の光明寺を訪問した。現在の住職は陳一信師である。師の父親が第二次大戦前および戦中にかけて本派本願寺の僧侶として活躍していたようだ。師はその長男である。師は台湾では数少ない妻帯者の僧侶である。浄土真宗では妻帯の僧侶は何ら問題がないのだが、台湾では数少ない妻帯僧侶の一人である。佛教はもとより、浄土真宗の立場からも嬰霊供養を認められないとし、次いで台湾の佛教界ではかなり多くの僧侶が嬰霊供養をしていると述べてくれた。その理由は、すでに説明したごとく、日本のような檀家制度のない台湾であるから僧侶が各自生計費を工面しなければならない。多くの参詣者があり、布施や献金の多い僧侶は別として、収入の少ない僧侶の生活は苦しいようだ。それゆえ、嬰霊供養による謝金を生計費としている僧侶がいる、との説明をして

くれた。

佛教と嬰霊供養

台湾では人間は単に肉体のみの存在とは考えられていない。佛教でも道教でも肉体と霊からなる、と考えている。もっとも佛教の場合、霊の存在をめぐって、日本仏教と同様に僧侶や研究者によって意見の違いがかなりあるのが感じられた。仏光山寺の尼僧の一人は阿頼耶識説より説明してくれた。だが、一般の人々は霊の存在を信じている。そして胎児にも霊がある、と考えている。

さて、中絶（流産をも含む）によって胎児の肉体は死をむかえるが、霊は存続するとしている。その霊は嬰霊となるわけだが、鬼になることもある。

道教における鬼の概念は、日本と違っている。鬼には邪鬼、精霊、動物霊、等々、もちろん人間の霊もそのうちの一つである。それゆえ、鬼は必ずしも「悪」というわけではない。だが、不幸な死に方をした者の霊は、恨みをはらすために「怨鬼（えんき）」となり、身代わりを見つけてこの世に再生し、活動する場合もあるとしている。また、死者の霊が「悪鬼」となって人間に災厄をもたらす、と考えている。道教には悪霊や邪鬼を取り除く神が多い。悪鬼の侵入を防ぐ門神（もんじん）、霊障や災難を防ぐ斗母元君（とぼげんくん）、悪霊を退治する、日本では端午の節句に飾る鍾馗（しょうき）等々である。

嬰霊が鬼（この場合は小鬼と呼ぶ）にならぬように願うのは当然であろう。仏教は人間が死ぬと鬼になる、とする考えには否定的である。中国仏教では六道輪廻の立場から鬼になるのは餓鬼道におちた者のみ、としている。嬰霊は生きた人間として業を作らなかったので鬼になることはないのである。だが、佛教の信者であっても嬰霊が小鬼となり、いきている人間に影響がある、と信じている者が多いようだ。中絶をした女性（夫や相手の男性）が嬰霊に対し罪の意識を持つのは自然な気持であろう。そして、嬰霊は両親や家族の者に復讐し、不幸をもたらすかもしれぬ、と考えるわけだ。中絶に対し罪の意識を持つ者が嬰霊に許しを請い、不幸をもたらさぬようにしてほしいとの願が嬰霊供養となる。

道教では嬰霊供養を宗教行事としている場合が多い。しかし、佛教の僧侶の中にも極めて道教的な立場から嬰霊供養の必要性を説く者もいる。尼僧の許瓊月は台北の寺院で供養を行っている。師はその著『墮胎嬰霊與胎教』で“中絶は殺人であり、その霊が嫌悪や恨みとなって母親が妊娠したとき、母親の子宮に入り、不幸をもたらす。即ち、中絶は悪い業を作ることになるので供養が必要”と書いている。

佛教の僧侶や寺院では許瓊月のように、供養を宗教行事として重視しているのは比較的少ない。だが、嬰霊供養に対し中間的な立場を取っている僧侶や寺院がかなり多い。その場合、嬰霊供養をしていることを明らかにするのは控えている。しかし、年に数回、あるいは毎月の法要の際に嬰霊供養を同時に行っているようだ。台湾の佛教寺院では次のような法要が行われる。

水陸法会一本来、水と陸の事故で死亡した者の精霊を供養するものであったが、多くの寺院ではすべての死者の精霊を供養するものとしている。また同時に死者への戒を授け、その戒の功德により救われるものである。

瑜伽餓口—中国系の佛教で最も多く行われている儀式で、冥衆（餓鬼道）におちた者を救う目的のものであったが、現在では水陸法会と同様にすべての精霊に対するものとされている。日本の施餓鬼供養に相当する。

その他、地藏法会、亡霊追善等の儀式があるが、いずれも死者の霊に対する供養である。

これらの法要で嬰霊供養を行うわけだが、それは法要の中心ではない。いわば法要中の一部となっているだけである。なお、許瓊月師のように個人の依頼で嬰霊供養をすることはほとんどないようだ。

筆者は嬰霊の戒名（法名）について興味を持っていたので、多くの僧侶の方に聞いてみた。その結果、戒名をつけることはほとんどない、との返事が多かった。しかし、戒名はつけられないものの、位牌を書くことがある、との返事もあった。位牌は（１）「嬰霊」、（２）「無縁児」、（３）「張宝宝霊」等々である。宝宝とは見えない赤ちゃんの意味である。それゆえ、張家の見えない赤ちゃん、となる。

龍湖宮の嬰霊供養

道教では嬰霊供養を行っている宮や廟が多い。そのなかで最も良く知られているのが苗栗県龍昇村にある龍湖宮である。筆者は2003年3月10日、龍湖宮を訪ねる機会を得た。この宮は小学校の教師引退後、道教の道士となった林健一（道士名・道玄）が1975年に創設したものである。なお師は中学校まで日本語による教育を受けたとのことで日本語で話をしてくれた。龍湖宮は台湾ではかなり著名で、しばしば話題になるようだ。著名な女性、もっとも芸能界の女性だが、龍湖宮で嬰霊供養を受けたことが新聞や雑誌で取り上げられるのが理由の一つである。

龍湖宮では北極星のシンボルで悪鬼妖怪を退治する神とされる玄天上帝を本尊としてい

る。この本尊は150年ほど前に建てられた近くの道教の宮から移してきた、とのことである。

嬰霊供養を受ける者はまず次の三つの物が渡される。(1)「紅文」と呼ばれる二枚の申込用紙。一枚は「召請冤魂紅文」というもので嬰霊を呼ぶものである。もう一枚は「超抜嬰霊骨肉霊和冤積結紅文」で嬰霊を成仏させるものである。両方の用紙に供養を受ける者は住所、氏名、年齢等を記入する。

二枚の紅文を提出すると林師から線香(かなり長めの)と一種類であるが、かなり多くの霊符が渡される。霊符とは神と人を結ぶ神秘的な力を発揮するものとされている。龍湖宮の霊符はからし色の紙製で、中央に円が描かれているが、円の中に多くの文字が書かれている。まわりには「極楽浄土」と書いてある。筆者は多くの道教の宮や廟を訪ねたが、どこでも霊符が渡された。もともと、近くの店で購入するように言われた。

供養を受ける者は次いで玄天上帝が祀られている本殿に入る。本殿の正面は玄天上帝だが、右側に阿弥陀佛、左側に地藏王菩薩が祀られている。地藏王菩薩は、釈迦入滅後、弥勒仏の出現する迄の間、衆生を化導する菩薩とされる。道教の宮や廟は佛教との混合が多い。林師の説明を受けるうち佛教との混合を更に強く感じた。まず、嬰霊の供養に経を読むが、『聖帝大解冤経』という道教の経典とともに『阿弥陀経』と『般若心経』が読まれるようだ。

嬰霊に戒名がつけられる。それは「佛力・超(薦)〇〇霊位」のような戒名で、横に母親の名が書かれている。「佛力」という文字が使われていることから、嬰霊が成仏するのを願っていることになる。また、「超(薦)」は霊位を意味する。筆者に示してくれた戒名は、「佛力・超(薦)紀水波霊位」というものであったが、これは林師によってつけられたものである。「紀水波」の意味について“それは靈感によってつけました。誰でも現世の名と前世(生)の名があります。嬰霊は生まれる前に亡くなったので、現世の名がありません。しかし、靈感によって私は両方の名を知ることができます。紀水波は天界における名前です”と答えてくれた。

佛教との混合を更に強く感じたのは、すでに2万を超している「嬰霊地藏」である。嬰霊供養を受ける者は、プラスチック製の15センチほどの仏像に戒名が書かれたものが授けられ、それを龍湖宮の特別室に安置する。その像は二種類で、一つは釈迦像、他は阿弥陀佛の像である。また、年に二回、三日間にわたる特別法要(春祭と秋祭)が勤められるが、毎年多くの佛教僧侶が参加するとのことであった。

龍湖宮で嬰霊供養を受ける場合、費用がかかる。最初は1,200台湾ドル(2003年3月で、約4,000円)である。その後、少なくとも3年間は同額の供養費が義務づけられている。また、年に二回の特別法要への参詣を義務としている。その時にもやはり献金をするのが普通ようだ。この3年間の供養について、師は“亡くなった人が転生するのに4ヶ月から3年はかかります。もし、供養を続けなければ、両親や家族の者に恨みをもたらします。また、嬰霊が輪廻転生によって畜生(動物)になるかもしれません。それゆえ、嬰霊が成仏するため3年間は必要なのです”と説明してくれた。

龍湖宮で嬰霊供養を受ける人は、近年では5千から6千とのことである。台湾で龍湖宮に対する批判を何回か聞いたが、いずれもその真の目的が「金儲け」にあるのだ、と言っている。

龍湖宮の場合、年会費は決められているが、他の道教の宮や廟ではかなり高額を要求することもあるらしい。林師は費用の点についてはやや気にしているのであろう。師は地域社会のために高額の寄付をしている。多くの感謝状が本殿の壁にかかっていた。

むすび

台湾において嬰霊供養が一般化していくか否かを予測するのは困難である。しかし、すでにふれたごとく、台湾の新しい仏教が注目され、多くの人々が信者や会員になっている。佛教界で嬰霊供養を積極的に行っているところは極めて少ない。だが、多くの寺院や僧侶は大法要の折に嬰霊供養を同時に行っている。だが、筆者が訪問した花蓮市の慈濟功德会で興味深い話を聞いた。ここは、佛教を日常生活の中に生かすのを目的としている。1966年、台湾のマザーテレサと呼ばれる尼僧の澄巖師が慈濟功德会を設立し、その後、1980年に佛教慈濟慈善事業基金会を設立した。会員の寄付金によってさまざまな奉仕活動を行っている。現在の会員数は4百数十万で、台湾の総人口の20%を超えている。

筆者は、2003年3月12日に同会の総合病院を訪ね、医師、看護師、ボランティア(毎日、百数十名のボランティアが奉仕している)に佛教と生命倫理について質問をした。この病院は台湾東部地区では肝臓、腎臓、角膜、骨髄移植等が行える唯一の病院である、と説明してくれた。また、非血縁者間の骨髄移植手術では世界的に著名であることを語ってくれた。筆者は、そこで、中絶と嬰霊供養について質問をしたところ、“中絶は殺生戒にあたるので、絶対に認めることができません。もちろん、嬰霊供養を認めるわけにはいきません”という返事があった。慈濟会の活動は高く評価されている。また、会員数も年々増

えている。同会の中絶や嬰霊供養に対する考えが今後台湾の佛教界、そして道教の嬰霊供養にどのような影響を与えていくであろうか。今後も注目する必要がある、と感じた。

参考文献

- 学研『道教の本』学習研究社、2002年。
- Keown, Damien 2001. *Buddhism and Bioethics*. Palgrave.
- Keown, Damien (ed.) 2000. *Contemporary Buddhist Ethics*. Curzon Press.
- 窪 徳忠「道教」『世界宗教総覧』新人物往来社、1993。
- 李 世偉編『台湾宗教総覧』博揚文化事業有限公司、2002年。
- 林 健一『霊界探索興霊障因果』龍湖聖訓雜誌社。発行年不明。
- 林 健一『霊異霊界実相』台北明生出版、1996年。
- 箕輪顕量「台湾の佛教」特集「東アジアの佛教世界」『東洋学術研究』39（1）2000.5 p76-94.
- Moskowitz, Mark 2001. *The Haunting Fetus: Abortion, Sexuality, and the Spirit World in Taiwan*. University of Hawaii Press. 2001.
- 酒井忠夫「中国・台湾史より見た台湾の道教」『台湾の宗教と中国文化』風響社、1992。p11-41.
- 許瓊月『墮胎嬰霊興胎教』禅門出版社、1995。
- Appeasing the Ghosts of the Unborn (<http://taipeitimes.com>)
- The Report on Women's Status in Taiwan (<http://taiwan.yam.org.tw>)

小論を書くにあたり多くの方々意見を参考にした。また、中国語の翻訳に留学生の協力を頂いた。氏名を記すことで感謝の意を表したい。(敬称略)

台北市—孫鳴鴻 釈恵光 龍湖宮—林健一(道玄) 光明寺—陳一信
佛光山寺—慈怡 依昱 滿果 恩主公医院—陳榮基 台大医学部—邱泰源
前新竹県医師会会長—周炳煌 佛光慈濟会—陳濟源 劉恰如 (順不同)
以上は主なの方々であるが、他にも多くの方々の意見を聞いた。

キーワード：中絶胎児、台湾の宗教、嬰霊供養、龍湖宮

Key words: Aborted fetus, Religions in Taiwan, Religious service for aborted fetus, Dragon Lake Temple